

序 新版の刊行に際して

1994年に刊行された『花粉症の科学』は、幸いに多くの読者に読まれ、2年ほどで5刷に及んだ。その後、花粉症の動向や予防と治療、治療薬、行政の対応など、各分野でかなりの変化と進展がみられている。

いま、全国のスギ花粉症の有病率が全体で16.2%という調査結果がある。花粉環境を含め発症要因の改善が当分期待できない現状では、この有病率は今後どうなるのか。幸い、治療薬の開発にはかなりの進展がみられ、医療サイドでも薬の選択の幅が広がった。その上、「診療ガイドライン」も設定され、花粉症の診療体系は一応整ったといってよい。さらに中央、地方行政も本腰を入れて花粉症対策に取り組み始めており、その成果に期待が込められている。

これらの現状をふまえ、新たに共著者として気象予報士の村山貢司が加わり、花粉と花粉症に関する最新の知見をもとに、さらに内容の充実を図った。そこで本書を前書の新版として刊行する次第である。

往時の結核に次いで第二の国民病といわれ始めた花粉症の克服のために、著者らはこれをライフワークとして鋭意研究を続けている。生物学、化学、薬学、医学などの広い分野で花粉症に関心のある方々や実際に花粉症で悩んでおられる方々は、本書を通じて花粉症の現況を理解し、将来展望もできることと思う。科学技術の進歩により、近未来には花粉症の完全制御は可能という将来予測もあり、花粉症の将来は明るいと思う。

2006年1月

齋藤洋三・井手 武・村山貢司